

ヴォルテール思想におけるギリシアの哲学者と蛮族の哲学者 ——『エウヘメロスの対話』研究Ⅲ：第6、7、8の対話——

棚 木 泰

L'Idées Voltairiennes des Philosophes Grecs et Barbares —
Etudes sur les *Dialogues d'Évémère* III: Les Sixième, Septième et Huitième
Dialogues

Yasushi TOCHIGI

はじめに

『エウヘメロスの対話』では冒頭、つまり第1の対話からアレクサンドロス大王の歴史的偉業がじつは悪業であると、象徴的にギリシア人批判が始まるのであるが、本書全体を通じてヴォルテールは、とくにプラトンを中心としたギリシア哲学の理論体系に対して、エウヘメロスの口を介してかなり辛辣な批判を浴びせている。

この小論で扱う第6、7、8の対話（以下「本対話」と略称）では、いわゆる地動説の発見とその合理的、科学的方法への賛辞と、異端審問による迫害への非難を訴えることが目的で、プラトンらはそのためのお膳立てにされているにすぎないと見ることもできる。これらの対話によって、啓蒙思想家ヴォルテールは、対話相手のカリクラテスに代表される無知な大衆（ギリシア世界のそれではなく、同時代のフランスの大衆であることは言うまでもない）に宗教的権力による抑圧から合理的、科学的精神にめざめるよう呼びかけているのである。

以下に、本対話において論じられるキーワードとも言うべきギリシア哲学とプラトン、デカルト、ガリレイ、ニュートンについて、ヴォルテールがどのように見ていたか、他の著作での言及部分からまとめてみたい。

ギリシア哲学とプラトンについて

本対話では、著者の執念とも言うべきプラトン批判のついでに、返す刀でアリストテレスにも切り付けているのであるが、本対話以前の「対話」において明らかにされたように、この2人のほかにも、とくに靈魂不滅説あるいは創造神などに関連して、ヴォルテールが槍玉に上げたギリシア哲学者は、アナクサゴラス、ディオゲネス、エピクロス、ソクラテス、ピュタゴラスと、ほとんど手当たり次第の感がある。

しかし、ヴォルテールはとくにエジプト人、ペルシア人、カルデア人、インド人と比べて、「ずっと自由でずっと幸福だったギリシアでは、学問への道はすべての人に開かれており、誰でも自分の考えを自由に伸ばし発展させることができた。そして、そのことこそが、ギリシア人を世界で一番才能のある民族としたのである」と書いているとおり、ギリシア哲学者たちの思想傾向、ましてや才能を過小評価していたわけではけっしてない。「ギリシア人はかくも多くの才能を持っており、そのためこれを濫用したのである。しかし、彼らにとって大きな名誉となることは、彼らの政府のどれ一つも、人間の思想に対し邪魔立てしなかったことである」。⁽¹⁾

プラトン (Platon, 紀元前427-347) に対して、ヴォルテールは容赦しなかった。イギリスに渡り、学問のみならず政治・社会の思想と制度について大きな衝撃を受けたヴォルテールは『哲学書簡 (*Lettres philosophi-*

ques)』を書いたのであるが、ニュートンとその学説との出会いは彼を哲学的に「回心」させるほどの大事件であった。ヴォルテールは多くの著作においてプラトンに言及しただけでなく、『プラトンの夢 (Songe de Platon)』(1738)という風刺コントさえ書いている。この短編は「プラトンは夢ばかり見ていた」という書き出しで、18世紀フランスの哲学者が、古代ギリシア哲学者の学説の非合理性、すなわち非科学性を揶揄している。

これとはほぼ同年代に書かれたと思われる著作に『ソティジエ (Le sottisier)』と題する小品がある。これは19世紀にペテルスブルクのエルミタージュ宮の図書館で発見された、ヴォルテールが漫然と手帳に書きつけた身辺雑記で、著者のユーモア、風刺、知性のきらめきを随所に発見できる。Sottisierとは、リトレ辞典によれば、「書籍や新聞記事に顕われた滑稽な誤り集」という意味である。この中にも「プラトン(『共和国』) Platon (République)」という項目があり、「彼(プラトン)は靈魂不滅を証明しようとして、じつにひどい論法を持ち出した。いわく『肉体の病気は肉体を破壊する。しかし靈魂の病気は靈魂をいささかも破壊しない』と」書いている。⁽²⁾

ヴォルテールが『ニュートン哲学の諸要素 (Eléments de la philosophie de Newton)』を刊行したのが1737年で、この時期はいわばヴォルテールの「ニュートン期」であり、彼が「実験に基づく方法に回心したことにより、形而上学者たちの強力な想像力はその犠牲となったのであり、プラトンはその第1標的にされた」⁽³⁾のである。

一方では、ヴォルテールは理論的、思弁的にすぎ、プラトンの著作の読み方がかなりおおざっぱであったと言われる。それに、彼はギリシア語が読めなかったため、もっぱらダシエ夫人(M^{me} Anne Lefebvre Dacier, 1647-1720)の手になる翻訳に頼ったのであるが、この訳者はプラトンを「キリスト教以前のキリスト教徒と見なしていた」⁽⁴⁾のである。

ヴォルテールは上述の著作のほかにも、『百科全書に関する疑問 (Questions sur l'Encyclopédie)』(1770-72)中の「プラトン」の項や『ルイ14世の世紀 (Le Siècle de Louis XIV)』において同様のプラトン観を展開している。現代の研究者ジャン・グールモ (Jean Goulemot) が指摘するように、ヴォルテールのプラトン観は、「彼(ヴォルテール)の理神論を補強するものであるか、キリスト教への保証を追求するものであるかによって、陶醉ともなり、反発ともなる」⁽⁵⁾のである。

デカルトについて

デカルト (Descartes, 1596-1650) はヴォルテールの批判の対象とされた「蛮族の哲学者」である。ガリレイとはほぼ同時代の科学者であったこの「近世哲学の父」がヴォルテールのお気に召さなかった所以は、神の存在についての証明法であり、渦動説であり、光の分析である。「ヴォルテールは、もしデカルトが物体の理解において誤りを犯しているとするれば、彼の靈魂の分析についても疑ってみなければならないと結論づけた」⁽⁶⁾というわけである。

デカルトについてヴォルテールが言及したものとしては、『哲学書簡』の「デカルトとニュートンについて (Sur Descartes et Newton)」がよく知られている。しかし、ここではニュートンとの比較において論じられており、少なくとも、デカルトが近代科学への道を切り開いたことを冷静に客観的に評価している点で、当然ながら本対話(第7の対話)のエウヘメロスによるデカルト論と一致している。「デカルトはその形而上学的誤りの度が進むに及んで、二足す二が四になるのは、神がそうお望みになったからであると言うようになってしまった。だが、彼はその過ちにおいてさえも尊敬に値すると言っても、少しもほめすぎにはならない。彼は考えちがいをしたが、でもその間違いは少なくとも系統だっており、首尾一貫した精神のもとで起こったものであった。彼は二千年来青年を熱中させていた不条理な妄想を打ちこわした」⁽⁷⁾のである。

ガリレイについて

ガリレイ (Galilei, 1564-1642) は、ヴォルテールにもっとも強いシンパシーを懷かせた哲学者・科学者と

言えるだろう。それは実験によって到達した真理の保持者であると同時に、プラトンに匹敵する優雅な文章の書き手である才人というだけでなく、ヴォルテールの生涯のテーマともいえるべき神学と異端審問による弾圧に抗して生命を賭して闘い、その犠牲となった人間であるという事実ゆえである。「ヴォルテールは、ガリレイが味わった屈辱はアテナイの賢人の死に比せらるべき進歩であると認めたが、ソクラテスからガリレイまで、歴史は絶望に行き着くまで繰り返される」⁽⁸⁾のである。

当然ながら、ヴォルテールのガリレイへの言及は書簡を含め、本対話以外にも長短多数の著作に見られる。そのうち、もっともていねいに解説しているのが『歴史哲学』あるいは『風俗試論』第121章「15世紀及び16世紀の慣習 (Usages des XV^e et XVI^e Siècles)」である。「ガリレオは最初のすぐれた物理学者であっただけでなく、プラトンと同じくらい美しい文章を書いた。しかも、確実にわかりやすい事柄しか書かなかったという点でこのギリシアの哲学者よりはるかに勝っていた。この偉大な人物が晩年、異端審問によって受けた扱いは、もしガリレイの栄光そのものによって消されることがなかったなら、イタリアに永遠の恥辱を残すところだった」。⁽⁹⁾また、『百科全書に関する疑問』の「権威 (Autorité)」の項では、「ここで7人の枢機卿たちがフランスコ会員らの立ち会いの下で、66歳のイタリアの思想の指導者を投獄させ、パンと水を禁じたのである。それは、彼が人類に教えたからであり、彼らが無知だったからである」。⁽¹⁰⁾

さらに韻文によるコント『オルレアンの処女 (La Pucelle d'Orléans, Poème héroï-comique en vingt et un chants)』(1755)第3歌にも、ガリレイの味わった不当な屈辱がうたわれている。「銜学的会衆の祝別された足下に、見えまいことか、正しいことを言ったために有罪とされ、罪を悔いて彼らに許しを乞う、哀れなガリレイの姿が」。⁽¹¹⁾

ニュートンについて

ニュートン (Newton, 1643-1727) はおそらくヴォルテールが深く掘り下げて研究した唯一の哲学者である。ヴォルテールが渡英したとき、ニュートンはまだ生存していた。数か月後にウエストミンスター寺院で執り行われた盛大な葬儀を目撃した彼は、その感想を『哲学書簡』第23信に記している。同時代人として知ったこの天才科学者とその著作について学び、衝撃を受けたヴォルテールは、したがっていわば「英国便り」である『哲学書簡』の中に、天文学や光学における彼の発見をフランス人のために詳細に解説した「手紙」を多数発表した。とくに、第15信「引力の体系について (Sur le système de l'attraction)」、第16信「ニュートン氏の光学について (Sur l'optique de M. Newton)」、第17信付録2「ニュートンについて (Sur Newton)」、第23信「文学者に払われるべき尊敬について (Sur la considération qu'on doit aux gens de lettres)」がある。

さらに前述の『ニュートン哲学の諸要素』をまとめ、とくに引力及び光学における発見によって、ニュートンは「われわれのコロンブスであり、われわれを新世界に導いてくれた」と賛辞というよりむしろ感謝の念を記している。

また、上述の『哲学書簡』のニュートンに関する手紙の中に、彼との比較においてデカルト批判が再三にわたって現われる。たとえば、第15信の冒頭に次のような記述がある。「われわれの宇宙の体系については、あらゆる惑星を回転させ、またそれらを軌道の上に引きとどめている原因、そしてまたあらゆる物体をこちらへと、地球の表面のほうへと落下させる原因をめぐって、相当以前から議論がたたかわされていた。デカルトの体系は、彼以後に説明が補足されまた多くの変更が加えられて、これらの現象を一応もっともらしく説明しているように見えた。そしてこの説明が簡単で誰にも理解しやすいものであったので、それだけいっそうほんとうらしく見えた。しかし哲学においては、あまり簡単にわかるように思える事柄は、わからない事柄と同様に用心しなければならない」。⁽¹²⁾

この哲学者あるいは科学者一般の心構えとも言うべきヴォルテールの主張は、次の書簡に巧みに要約されている。「もしあなたが自然の研究と真剣に取り組みたいのであれば、いかなる理論体系も立てないことから始めなければならないと申し上げることをお許しいただきたい。ボイルやガリレイやニュートンのような人

物の取った態度を取らねばならないのです。観察し、重さを量り、計算し、長さを測定するのであって、けっして推測してはなりません。ニュートン氏はけっして理論体系をつくりませんでした。彼は、自分の目で見て、他人に見せるのです。真実の代わりに自分の想像を入れたことは一度もありません。われわれの目と数学とがわれわれの前に明らかにするもの、それを真実と見なすのです。それ以外のいっさいについては、こう言うのみです。わたしは知らないと」。(13)

むすび

18世紀啓蒙思想家がなぜ紀元前4世紀の哲学者の天文学の知識の誤りを同時代のギリシア人の口を借りて批判するのか。しかも、その後の学者たちの理論の積み重ねを基礎として、天文学上の発見を成し遂げたはるか後代の天才たちの偉業と比較しての話である。ヴォルテールがこの古代ギリシア人同士の対話のかたちで、同時代のフランス人に訴えようとしたのは、『カンディッド (Candide)』や『アンジェニュ (L'Ingénu)』などの風刺小説、そして「カラス事件」への彼自身の関わりに表われている主張と同じである。ひとことで表現するなら、狂信主義の迷妄に対する言論による攻撃であり、首尾一貫した「恥知らずを叩き潰せ (Ecraser l'infâme)」である。

そして、この18世紀フランスの賢人の訴えが、21世紀を迎えようとしている現代日本の状況に十分通用する普遍性をもつことは、一々具体例を挙げて説明するまでもないであろう。

<注>

- (1) Voltaire, *Essai sur les mœurs et l'esprit des nations et sur les principaux faits de l'histoire depuis Charlemagne jusqu'à Louis XIII*, XXI "Les écoles grecques". 安斎和雄訳『歴史哲学—「諸国民の風俗と精神について」序論』26「ギリシア人の諸派」pp. 26-27.
- (2) Voltaire, *Le Sottisier*, L'LINEA, 1992, p. 92.
- (3) Edouard Guitton, *Notices et notes sur Songe de Platon*, Librairie Générale Française, 1994, p. 881.
- (4) Jean Goulemot, "Platon", *Inventaire Voltaire*, Quarto Gallimard, 1995, pp. 1057-58.
- (5) 同上、p. 1058.
- (6) Didier Masseau, "Descartes, René", *Inventaire Voltaire*, Quarto Gallimard, 1995, pp. 391.
- (7) Voltaire, *Lettres philosophiques*, 1734, XIV^e lettre, <Sur Descartes et Newton>, 中川信訳『哲学書簡』第14信「デカルトとニュートン」世界の名著35、中央公論社、1980、pp. 144-145.
- (8) Jean Goulemot, "Galilée, Galiléo", *Inventaire Voltaire*, Quarto Gallimard, 1995, pp. 583.
- (9) Voltaire, *Essai sur les mœurs et l'esprit des nations et sur les principaux faits de l'histoire depuis Charlemagne jusqu'à Louis XIII*, CXXI "Usage des XV^e et XVI^e siècles", p. 172.
- (10) Voltaire, *Questions sur l'Encyclopédie*, 1770-1772, art. <Autorité>—projet d'une inscription à graver <à la porte du Saint-Office>
- (11) Voltaire, *La Pucelle d'Orléans, Poème héroï-comique en vingt et un chants*, Chant troisième.
- (12) Voltaire, *Lettres philosophiques*, 1734, XV^e lettre, <Sur le système de l'attraction>, 中川信訳『哲学書簡』第15信「引力の体系について」世界の名著35、中央公論社、1980、p. 146.
- (13) Voltaire, *Lettre à Claude Nicolas Lecat*, 15 avril 1741.

<本文試訳>

第6の対話：プラトンやアリストテレスは神について、世界の形成について、われわれに教えてくれたか
Sixième Dialogue: Platon, Aristote, nous ont-ils instruits sur Dieu et sur la formation du monde?

カリクラテス

それでは最初に、神はいかにして世界という作品の制作に取り組んだのか、言ってくれないか。この壮大な作戦に関するきみの説を聞きたい。

エウヘメロス

神の作品に関するわたしの説は、知らないということだよ。

カリクラテス

しかし、きみが神の秘密を知らないと告白するだけの誠意があるなら、少なくとも、あたかも神の実験室にいたかのようにそれを知っていると主張する連中をどう思うか、教えてくれてもよからう。アリストテレスやプラトンはきみになにか教えてくれたかい。

エウヘメロス

彼らの著作をことごとく疑ってかかれとね。きみも知ってのとおり、シュラクサイにアルキメデス家がおって、実践物理学を父親から息子へと伝え育てている。これこそ、実験と幾何学とに基づいた真の学問だよ。これを続けていけば、この一家は相当なことをやり遂げるだろうね。ところが、神格化されたプラトンの著作を読んだときは、仰天したよ。わずかばかりの幾何学の知識を使って、自分の想像を正確に見せかけようとしているのだから。

プラトンによると、神は、角錐体、立方体、8面体、20面体と、とりわけ12面体の面数に従って4大元素を配置する提案をしたのだそうだ。つまり、角錐体はその先端により火のすみかとなり、空気は8面体をすみかにした。20面体は水のすみかとなり、立方体はその堅牢さゆえに当然ながら土のものとなった。しかし、12面体とはプラトンの大手柄だよ。というのは、この形体は12の面でできているため、12の動物から成る12宮を形成するのだが、この12面をそれぞれ30の部分に分割すると、もちろん円の360°となる。太陽が1年間に1周する軌跡というわけだ。

プラトンは、このみごとな理論を一語一語まで、ロクリスのティマイオス⁽¹⁾から取ってきたのだ。ティマイオスはこれをピュタゴラスから取っており、ピュタゴラスはこれをインドの賢人たちから手に入れていたと言われている。

いかさま理論を推し進めるのはむずかしいものだ。それでもプラトンは身のほど知らずにも、さらに自分からこう付け加えている、神は自らの言葉、つまり彼が神の子と呼ぶ自らの知性、言葉に従って、地球と太陽と惑星とから成る世界をつくったとね。神はその世界に靈魂を与えて、これまた神格化した。こうしてプラトンの有名な三位一体⁽²⁾が成立したのだ。それで、どうしてこの宇宙が神であったのかというと、丸かったからだ。円はもっとも完全な形だからね。彼はこの世界のあらゆる完全なものと不完全なものを、世界をつくったのと同じくらい易々と説明してみせる。とくに、『パイドン』において人間の靈魂不滅を証明する方法はじつに明快そのものだよ。

「まず君は、生きていることに対して、死んでいることは反対である、と合わないだろうか」

「たしかに、わたしはそう思います」

「そして、それらは相互から生成する、と」

「はい」

「それでは、生きているものから生じるのは、いったい何なのか」

「死んでいるもの、です」

「では、死んでいるものからは、何が、なのか」

「それは生きているものであると、たしかに同意せざるをえません」

「してみると、ケベスよ、死んでいるものから、およそ生きているもの(生物)が、また生きている人間と
いうのが、生じるのだね」

「そのように見えます」

「してみると、われわれの魂はハデスで存在していることになる」

「そうなりますね」⁽³⁾

プラトンは『パイドン』のこの対話において、ソクラテスにこんなふうに論じさせている。歴史の伝えるところでは、ソクラテスはこの著作を読んで、「わが友プラトンはなんというばかげたことをわたしに言わせるのか!」と叫んだそうだ。

もしこのギリシア人が神の過失と見なしたことをすべて神に知らせたとしたら、神はたぶんこう言ったろうよ。「そのギリシア人はなんというばかげたことをわたしにさせるのか!」とね。

カリクラテス

たしかに、神がプラトンを多少軽蔑しても無理ないだろうね。わたしは昨日彼の『饗宴』と題する対話を再読していて、大笑いしたよ。神は臍でつながっている男と女をつくったのだが、男が女の背中の後ろにいるというのだからね。彼らは2人で頭は1つしかなく、それぞれ顔を1つもっている。アンドロギュノス⁽⁴⁾と呼ばれるこの動物は4本の腕と4本の脚をもつことを大いに誇りにしていたため、ティタン⁽⁵⁾のように天空で戦うことを望んだのだ。神は彼を罰するために2つに切り離したので、以来、片割れ同士、相棒を追い求めているのだが、めったに見つかったためしはない。この、つねに自分の片割れを追い求めるというのは巧妙でおもしろい考えだと認めざるをえない。しかし、このおもしろさは哲学者にふさわしいだろうか。パンドラの物語⁽⁶⁾のほうのはるかに美しいし、人類の犯した過ちや被った災難をずっとうまく説明しているよ。

今度はアリストテレスの理論体系についてどう思うか、聞かせてくれたまえ。プラトンのそれはきみの氣に入らないことがよくわかったから。

エウヘメロス

アリストテレスには会ったことがある。わたしには、師匠のプラトンより豊かにして確固たる精神の持ち主に見えたよ。真の知識に裏づけられた精神だ。彼は論理的思考を芸術にした最初の人物だ。彼の新しい方法は必要とされていたのだな。すぐれた精神には無用で退屈と言わざるをえないけど、ギリシア中にあふれている詭弁家たちの曖昧な言葉をはっきりさせるためには大いに役立つよ。彼は博物学の広大な野を開拓したのだ。彼の動物物語はみごとな著作だ。もっとおどろくのは、詩学と修辞学の最高の規則をつぐったのは彼なのだ。それについては、才人を自負していたプラトンよりもみごとに論じている。アリストテレスもプラトンのように、第一動者、つまり至高にして、永遠、不可分、不動の存在を認めている。天は完全であると言うことによって、その天が完全な物を包含していることを証明するのが正しいかどうか、わたしは知らない。どうやら彼は、天空にある惑星たちは神々を宿していると言いたいらしい。そのことによって彼は、惑星に神が住むと信じる、あるいは信じなくともそう言うギリシア人大衆の迷信に迎合しているのだ。

アリストテレスは世界は唯一であると断言する。その理由として、もし世界が2つあるとすれば、片方の世界の地球はもう片方の世界の地球をかならず探しに行き、2つともそれぞれの場所から出て行くだろうからと言うのだ。そう主張するところを見ると、彼は、地球が太陽を中心にしてその周囲を回転しているかどうかとか、地球はどのような力によってもとの場所に戻るのかについて、われわれ以上には知らなかったようだ。われわれが蛮族と呼ぶ諸国民の中にはこれらの真実を発見した哲学者がいる。ついでに言うなら、他の諸国民に教えてやっていると自慢するギリシア人にはまだ、これらのいわゆる蛮族の言を聞く資格はたぶんだらうよ。

カリクラテス

そいつはおどろきだな。でも、先を続けてくれたまえ。

エウヘメロス

アリストテレスは、いまわれわれが目に見えるようなこの世界は永遠だと考えている。その点で彼は、それが生み出されたものであり、腐らないものであると断言したプラトンを継承している。きみもそう思うだろうが、彼らは2人ともロバの影について論じているのだ。どのロバの影にも変わりがあるわけではないのにな。

アリストテレスが言うには、星はそれを運ぶ物体と同じ性質をもっている。ただ星のほうが集積してぎっ

しり詰まっているだけだと。星は空気を急激に摩擦することによって、地上に熱と光を起こすのだそうだ。大変動が木を燃え上がらせ、鉛を溶かすようにね。おわかりのように、とても正常な物理学とは言えないよ。

カリクラテス

われわれギリシア人はまだまだきみの蛮族の下で学ばなければならないということがわかったよ。

エウヘメロス

わたしは怒っているのだ。アリストテレスは、世界は永遠だと断言しておきながら、諸要素は永遠ではないと言うのだからな。だって、もしわたしの畑が永遠なら、その土も永遠であるはずではないか。諸要素は一方から他方へと常に変化するから、永続することができないというのが彼の主張だ。火は空気になり、空気は水に変わり、水は土になる。しかし、これら要素が絶えず変化するという事実は、それらが構成する世界が常に存続することを妨げないと言うのだよ。

じつを言うと、わたしは彼のように、空気が火になるとか、火が空気になるとは思わない。生成と腐敗について彼の言うことが、わたしにはまだとうてい理解できないのだ。彼はこう言っている。「すべての生成は腐敗に続いて生じる。この腐敗は終了期限であり、生成は開始期限である」と。これが、すべて生を受けたものは死滅するという意味だとしたら、わざわざ言う価値もない、くだらない真理だよ。ましてや、もったいぶって宣言するほどのことではない。

カリクラテス

彼は愚かな民衆でもわかるようなことがわかっていないのではないだろうか。すべての種は芽を出すために腐って、死なねばならない⁽⁷⁾ということが。彼ほどの賢明な観察者らしくもない。しばらく前に土に託された一粒の麦をしらべてみさえすればよかったのに。その麦は生き生きとして、よく養分が行き届き、根にしっかり支えられていて、腐るきざしなどまったく見られなかったはずだ。麦が腐敗から生まれると言う人間がいるとすれば、判断力が腐りきっているのだ。そんなことを信じるのはナイルの沿岸に住む野蛮な農夫ぐらいのものだよ。彼らは、半分腐って半分生きているネズミを見たと言ったが、彼らが見たのは泥まみれのネズミにすぎなかったのだ。

エウヘメロス

だったら、そのばかげた誤りに基づいて哲学をつくりあげたきみたちのエピクロスと縁を切ったらどうだい。彼は、人間はもともと、エジプトのネズミみたいに、腐敗から生じたと主張したのだ。泥が人間の創造神の代わりをしたと。

カリクラテス

わたしもそんな彼をいささか恥ずかしく思うよ。しかし、頼むから、アリストテレスの話に戻ってくれないか。彼はほかのすべての人間と同様、いくつかの真理に多数の誤りを混ぜているように、わたしには思えるのだが。

エウヘメロス

やれやれ、そりゃいっぱい混ぜてるさ。偶然に生まれた動物について、彼ははっきりこう言ったのだ。「自然の熱が収まると、腐敗を免れたものが太陽のはたらきによって命を授かろうとしている微少な分子と合体しようと努める。こうしてミミズやスズメバチやノミや他の昆虫が生まれた」とね。せめて人間を、こんな偶然で生まれたスズメバチやノミの仲間に入れなかったことを、彼に感謝したいぐらいだよ。

人間の義務について彼が言っていることには、わたしも全部よろこんで同意するよ。彼の道徳は彼の修辞学や詩論と同じくらいみごとだと思う。だが、彼の形而上学、ときには神学と称するものには、ついていけなかったね。存在するにすぎない存在だの、本質のみをもつ実体だの、10の範疇だの、わたしには無用の過度の精密さと思えた。それは概してギリシアの精神というやつだよ。ただし、デモステネス⁽⁸⁾とホメロスを除いてだが。デモステネスは聴衆に、強固にして明晰な理性だけしか、けっして示さなかった。ホメロスは読者に、偉大な人物像のみを提供した。だが、大多数のギリシア哲学者はもっぱら事物よりも言葉にこだわったのだ。彼らは無数の、なにも定義しない定義や、なにも発展させない区別や、なに一つ、もしくはほん

の少しのことしか明らかにしない説明の中に閉じこもっているのだ。

カリクラテス

だったら、彼らがまったくしなかったことをしてくれないか。アリストテレスが靈魂についてまったく説明していないことを、わたしに説明してくれたまえ。

エウヘメロス

では、彼が説明しないで言っていたことをこれから話すでしょうか。言うておくが、きみにはわたしの言うことがわからないだろうよ。というのは、わたしは自分でもわからないだろうからだ。

「靈魂はきわめて軽いなにものかである。それは自身ではまったく動かず、物体によって動かされる。靈魂は、他の多数の人間が考えたように、調和ではまったくない。なぜなら、それは絶えず反対の諸感情の不調和を被るからだ。靈魂はどこにでも広がっているわけではない。なぜなら、世界は生命のないもので満ちあふれているからだ。靈魂は原理と現実態とを閉じ込め、潜在的な生命をもつエンテレケイア⁽⁹⁾である。それはわれわれを生かし、感じさせ、思考させるのに役立つものである」

カリクラテス

こんな話をした後では、帰る途中、ひとりぼっちの靈魂に出会ったとしても、それとわからないと思うね。やれやれ、ギリシア人の靈魂は訳のわからない細々したことで、わたしになにを教えるつもりだろうか。きみが話してくれた蛮族の哲学者から学ぶほうがずっとましだろうよ。フン族やゴート族やケルト族の知恵がどういうものか、教えてもらえないだろうか。

エウヘメロス

ささやかながらわたしが学んだことを、なんとか説明してみるとしようか。

<注>

- (1) ロクリス (Lokris) のティマイオス (Timaios)。プラトンの対話篇『ティマイオス (Timaios)』に登場する、紀元前5-4世紀頃のギリシアのピュタゴラス派哲学者で、南イタリアのロクリスの人。
- (2) プラトンの思想がその基をつくったとされるキリスト教の三位一体 (Trinité) に対するヴォルテールの批判は『哲学辞典 (Dictionnaire Philosophique)』の「反三位一体論者 (Antitrinitaires)」の項において展開されている。
- (3) 松永雄二訳、プラトン全集1、岩波書店、1975、pp. 201-202。
- (4) アンドロギュノス (androgynos)、両性具有者。プラトン『饗宴 (Symposium)』189-190。
- (5) ティタン (Titan)。ギリシア神話のオリュンポス神以前の巨人族の神。ウラノス (天) とガイア (地) との12人の子。ゼウスとの戦いに敗れて冥界に追放された。
- (6) パンドラ (Pandora)。ギリシア神話で、人類最初の女性。神々からあらゆる贈り物を受け、箱を与えられて人界に遣わされる。好奇心からその箱を開けたところ、あらゆる災いが地上に飛び散り、希望だけが箱の中に残った。
- (7) 「あなたのまくものは、死ななければ、生かされないではないか。」(コリント人への第1の手紙第15章36)。Notes du Sixième Dialogue 3., CE, p. 73.
- (8) デモステネス (Demosthenes)、ギリシアの雄弁家 (紀元前384-22)。
- (9) エンテレケイア (entelekheia)、アリストテレス哲学で形相が可能態と結びついて自己を実現、完成した状態。実現されるべき目的としての形相の働きをも指し、ライブニッツによってモナド (单子) の別名とされた。DSR。

第7の対話 蛮族の中で咲いた哲学者たちについて

Septième Dialogue: Sur les philosophes qui ont fleuri chez les barbares

エウヘメロス

きみは、アテナイか、コリントスカ、シュラクサイで暮らしたことの無い者をすべて蛮族と呼ぶから、わたしは、そういう蛮族の中にギリシア人のだれ一人として理解できないような、そしてわたしたちみんながその弟子になるべきであるような、天才がいることを、改めてきみに言っておこう。

最初にお話する人物はリフェ山脈⁽¹⁾の北西にキンメル人⁽²⁾の許で暮らしていたフン族かサルマート族⁽³⁾の人で、名前をペルコニクス⁽⁴⁾という。この人物は、それまでカルデア人⁽⁵⁾が不完全な考えを漠然と抱いていた世界の真の体系を解明し証明したのだ。

この真の体系というのは、われわれ全員が、太陽が昇り沈むとか、われわれの小さな地球が宇宙の中心だとか、すべての惑星、すべての恒星、すべての天体はわれわれのちっぽけな住まいの周りを回っているとか言うとき、われわれは自分の言っていることを一言も知りもしないということなのだ。実際、何百億、何千億スタジオン⁽⁶⁾も遠くにあつて、地球より何十億倍も大きい多数の天体が、ただ夜間にわれわれの目を楽しませるだけのためにつくられ、われわれを喜ばせるために広大な宇宙でわれわれの周りを毎日24時間のプランル⁽⁷⁾を踊りながら回っているとしたら、どんなありさまだろう。そんなばかげた妄想はギリシア哲学者のだれ一人として直すことができなかった人間性の2つの欠陥に基づいている。つまり、われわれのちっぽけな目の弱さとわれわれの傲慢さによる思い上がりがそれだよ。星や太陽が動くのが見えると思うのは、目が悪いからだし、天体全部がわれわれのためにつくられていると考えるのは、われわれが軽薄だからだ。

われらがサルマート人ペルコニクスは著書のかたちで発表する前からその説を唱えていたのだ。この真理はナラの宿り木に大損害を与えると怒るドルイド僧たち⁽⁸⁾の反発をもともしなかった。真の賢人たちは彼に反論した。彼ほどの確信も自信もない人間なら当惑したことだろうよ。彼は、地球や惑星は太陽の周りを異なる時間をかけて周期的に回転していると確信していたのだ。われわれは、金星や水星やわれわれは太陽の周りを、それぞれの円をつくって動いている、と彼は言う。すると、賢人たちは彼にこう反論した。もしそうだとしたら、金星や水星は月のそのような位相を見せるはずではないかと。これらの惑星も同じ位相をもっている、とそのサルマート人は答えた。あなたがたも、もっとすぐれた視力をもてば、それが見えるでしょう、とね。

彼は賢人たちが必要とした新しい目を与えることができずに死んだ。

その目を、これよりもっとすぐれた、われわれの隣人エトルリア人の許で生まれたレイリガ⁽⁹⁾という名の人物が発見して、全地球を明るく照らし出すことになったのだ。どのギリシア人よりも上品で、賢く、器用なこの蛮族は、子ども相手の冗談まじりに聞かされた単純な話を基にして、水晶を切り出し加工して、新しい天体を見るものをつくり、件のサルマート人がみごとに予言していたことを目で見えて証明してみせたのだ。金星が月と同じ位相をもって姿を現わした。水星が同じような姿で現われなかったのは、太陽の光線をたっぷり浴びていたためだ。

われらがエトルリア人の成し遂げたことはまだある。新しい惑星をいくつか発見したのだ。「日は花婿がその祝いのへやから出てくるように、また勇士が競い走るように、その道を喜び走る」⁽¹⁰⁾と言われたその太陽が、自分の場所をけっして離れず、われわれが24時間で回るように、われわれの暦の25日半で自転するだけであることを、彼は自分の目で見るとともに、他人にも見せたのだよ。西洋では、この創造の秘密を知って人びとは大いにおどろいた。これは東洋ではけっして知られていなかったことだ。

ドルイド僧たちはわがエトルリア人に対して、わがサルマート人に対するよりもっと激しく怒りを爆発させたよ。⁽¹¹⁾彼らはもう少しで、あの気の狂ったアテナイ人たちがソクラテスに飲ませたように、彼にヒヨス⁽¹²⁾で味付けした毒ニンジン飲ませるところだったのだ。

カリクラテス

きみがいま言ったことはすべて、ただただ感嘆するばかりだよ。どうしてもっと早く話してくれなかったのだい？

エウヘメロス

頼まれなかったからさ。きみがわたしに話したのはギリシア人のことばかりではないか。

カリクラテス

ギリシア人の話はもうしないさ。その、偉大な哲人とも言えるエトルリア人は、詩人でもあるのだろうか？

エウヘメロス

もしホメロスが何百年か先に生まれていなかったら、わたしにはホメロスよりはるかにすぐれた詩人に見えただろうよ。やはり最初にきた者がなんといっても偉いからね。

カリクラテス

しかし、きみたちの悪玉のドルイド僧たちがこの尊敬すべきエトルリアの賢人レイリガを迫害した理由について、きみはなににも言わないのかい？

エウヘメロス

ヘロドトス⁽¹³⁾のどの本か知らないが、彼らがそこで読んだ理由だと、エジプトでは太陽が2度までも軌道を変えたというのだ。つまり、もし太陽が軌道を変えたとすれば、移動するのは太陽であって、地球ではないことになるからね。しかし、ほんとうの理由は、彼らは嫉妬したのだよ。

カリクラテス

嫉妬だって！ なにに嫉妬したと？

エウヘメロス

彼らは、人間に教えるのはドルイド僧だけだと主張していたのだよ。で、レイリガはドルイド僧でないのに、人間に教示したからな。これはまったく許されないことであるわけだよ。とりわけ、この偉大なレイリガが発表した真理が隣の共和国⁽¹⁴⁾で目で見えて証明されると、ドルイド僧たちの怒りは頂点に達したのだ。

カリクラテス

なんだって！ ローマ共和国でかい？ あの国はこれまで、物理学を学ぶのをあまり得意としてなかったようだがな。

エウヘメロス

ローマとはまったく異なる共和国でだよ。わたしが話しているのはイリュリア地方⁽¹⁵⁾とイタリア地方の中間にある国で、ローマに似ているところか、とりわけものの考え方においてはむしろ逆に近いよ。ローマ共和国は侵略的として知られ、イリュリアは侵略されることをまったく望んでいない。ローマにはとりわけ妙な癖があって、全世界に自分と同じ考え方をさせたがるが、イリュリアは思考については自らの理性にしか頼らない。レイリガはこの国の賢人たちに喜んで天体のみごとな仕組みをそっくり見せてやったのだ。彼は地球上でもっとも尊敬すべき人びとの前で神の代弁者を務めたのだ。その光景はアドリア海を見下ろす搭の高床⁽¹⁶⁾で繰り広げられた。あれほどみごとな見世物は二度と見られまいね。そこでは自然が演じられたのだ。レイリガは地球を演じ、共和国の首長サグレド⁽¹⁷⁾が太陽役を務めた。ほかに金星、水星、月が登場し、天空を回るこれらの星たちと同じ順序で松明行列をさせたのだ。しからば、ドルイド僧たちはなにをしたか。彼らは、この老哲学者に罰としてパンと水を断たせるとともに、彼が証明した真理を償うために毎日、子どもたちに習わせる教科書を暗唱するよう命じたのだ。

アテナイの毒ニンジン是最悪ということか。どの国にもドルイド僧がいるものだ。エトルリアのドルイド僧はアテナイのそれのように改悔したのかい？

エウヘメロス

そうだ。いまでは彼らは、太陽は回らないと言われると、恥ずかしそうにするし、この真理を実際に提起しないかぎり、太陽が惑星世界の中心であると考えを許しているよ。もしきみが、太陽は神が定めた場所に留まっていると確信していたら、しばらくの間はパンと水にありつけるだろうが、その後は、自分は無礼者であると、大声で告白させられるだろう⁽¹⁸⁾。

カリクラテス

その国のドルイド僧は変わった連中だね。

エウヘメロス

昔から言うだろう、どの国にもその国の儀式があるよね。

カリクラテス

この儀式は、エトルリア人やゴート人やケルト人の哲学者が理論を立てるのに嫌気を起こさせたのではないかな。

エウヘメロス

ソクラテスの死がエピクロスをうんざりさせたほどではないさ。わがエトルリア人が死んでから、西洋の北部は哲学者でいっぱいになったよ。わたしがガリア、ゲルマニア、そして大西洋のある島に旅をしてわかった。舞踊に起こったことと同じことが、哲学にも起こったのだよ。

カリクラテス

それはどういうことだい？

エウヘメロス

ヨーロッパでもっとも野蛮なある小国でドルイド僧が舞踊を禁止しており、メヌエットを踊ったある司法官とその妻を厳しく罰したのだ⁽¹⁹⁾。それ以来、みんながこぞって舞踊を習ったため、いたるところでこの楽しい芸術が上達した。かくして人間精神は新たな飛躍を遂げたのだ。だれもが自然を研究し、実験を行い、空気の重さを測定し、空気を閉じ込められていた場所から追い出し、社会に役立つ機械を発明した。これこそ、哲学の真の目的なのだよ。偉大な哲学者たちがヨーロッパを光で照らし、奉仕したのだ。

カリクラテス

中でももっとも評価の高かった人たちはだれなのか、教えてくれないか。

エウヘメロス

きみが聞くのを待っていたよ。一番有名になった人物ではなく、一番貢献した人物をね。

カリクラテス

両方とも、教えてもらいたいね。

エウヘメロス

わがエトルリア人以後、一番大騒ぎになったのは、カルデト⁽²⁰⁾という名のガリア人だ。非常に優秀な地理学者だったが、建築家としてはお粗末だった。というのは、彼は土台のない大建造物をつくったからだ、じつは宇宙のことなのだ。その宇宙を建築するのに、神に頼んだのは材料を貸してもらうことだけだった。それで彼は6つの面をもつサイコロをつくり、サイコロをけしかけて、自分は身動きできないにもかかわらず、太陽、恒星、惑星、彗星、地球、海洋を一挙につくらせたのだ。この奇妙な物語には物理学も、幾何学も、良識も、一言も出てこなかったが、当時のガリア人たちはそれ以上のことは知らなかった。彼らは偉大な物語をもつことで非常に有名だったのだ。その物語を広く普及させたため、イソップ直系の子孫が次のように言っている。

カルデト(デカルト)先生、異教徒ならば、神様ともしよう
ほどの人間、あたかも牡蛎と人との間を
ある我らの下僕たち、駄馬や駄牛がしめるやう、
人間と靈魂の間の地位を占める人…

『ラフォンテーヌ寓話』第10巻第1話⁽²¹⁾

このイソップ家のケルト人の談話は人民の声ではあるが、賢人の声ではない。

カリクラテス

きみたちの創造者カルデトはプラトンの半分にすぎないよ。なぜなら、そのガリア人は6面のサイコロで地球をつくったにすぎないのに、プラトンは12面のサイコロを要求していたからだ。それが、われわれギリシア人全員がその学派について学ばねばならないきみたちの哲学者だということかい？ 一国民全体がどうしてそんな途方もない話を信じることができたのだろうか。

エウヘメロス

シュラクサイの人たちがエピクロスのばかげた妄想だの、衰退する原子だの、中間界だの、偶然に泥でつくられた動物だの、その他信じきって細々とまくしたてる無数のばかばかしい話を信ずるようにさ。おまけに、国民の大多数をカルデトの理論体系に向かって猪突猛進させるような強力な秘密の理由があったのだ。つまり、多くの点でドルイド僧の教義と正反対のように見えたのだよ。なぜかは知らないが、このドルイド僧というのは、イタリアでも、ガリアでも、ゲルマニアでも、北方でも、好かれないのだな。たぶん、よく間違いをする民衆が、彼らのことを強すぎ、裕福すぎ、傲慢すぎと思っているからだろう。それに、彼らはレイリガを迫害したように、このあわれなカルデトを迫害もしたし。ソクラテスやアニュトス⁽²²⁾みたいな人物がいる国は1つだけではないのだ。北欧では長い間、だれも見たことのない3種類の、物質だの、一度も存在したことのない渦だの、変転的恩寵⁽²³⁾だの、その他、アリストテレスの実体的形相やプラトンのアンドロギュノス以上に現実離れした多数のくだらぬ話について起きた論争で満ちあふれていたのだ。

カリクラテス

もしそうなら、きみたちの蛮族はギリシアの哲学者よりどんな優越性がもちうるのかな。

エウヘメロス

それをこれからお話することにしよう。3つの物質、その他もろもろの空疎な考えについて論争がさかんに戦わされているなか、実験によって感じたこともしくは数学によって証明されたことしか真理と認めようとしない良識派がいたのだ。そういうわけだから、言葉について話し合うことをその理論体系とした、才能ある人物のことも、靈魂についておどろくべき想像力を見せた、もっと才能に恵まれた人物のことも、きみに話をするつもりはないよ。

カリクラテス

どういう意味かな、その言葉についての会話というのは？ プラトンの言葉のことかい？ だとしたら、奇妙だな。

エウヘメロス

それはもっとも尊敬すべき言葉と言われている。ところが、それはさっぱりわからないし、だれもその会話に第3者として加わったことがないのだから、そこでなにが語られたのか、わたしには知るすべがないのだよ。

カリクラテス

で、もう一人の、靈魂についておどろくべきことを言った蛮族は、われわれにどんなことを教えてくれたのだい？

エウヘメロス

調和というものがあると。

カリクラテス

勘弁してくれよ！ その靈魂の調和とやらを、もうずいぶん前にさんざん聞かされたし、エピクロスが十分反論したではないか。

エウヘメロス

いやいや、こちらは別もので、予定調和というのだ。

カリクラテス

予定であろうとなかろうと、わたしにはさっぱりわからんよ。

エウヘメロス

本人もわかってないさ。だが、彼が言ったのは、肉体が靈魂に依存することも、靈魂が肉体に依存することもなく、靈魂は勝手に感じたり思ったりし、肉体は自分の意に従って行動するということだ。その結果、肉体は世界の一方の端に、その靈魂は他方の端に、互いにまったく連絡し合うことなく、両者とも同時にひとつの完全な知性として、存在しうることになる。一方がアフリカの奥地でヴァイオリンを弾けば、他方は

インドで拍子取り取り踊るというわけだ。この靈魂はその夫たる肉体と、けっして話をすることなく、常に意見が一致している。靈魂は宇宙の同心鏡だからだ。よくわかるだろう？

カリクラテス

皆目わからんよ、おかげさまでね。しかし、そういう立派な事柄は証明されているのかね。

エウヘメロス

されていない、わたしの知るかぎりはね。しかし、科学と呼ばれるものいっさいに関する同心鏡である精神の金棒引きたちが、年に1度、30オボロス⁽²⁴⁾もらって、そいつを言いふらしている。それで、この発明家の栄誉は十分保たれるし、彼の熱心な同志たちも大満足というわけさ。

言葉についておしゃべりをする連中や、同心鏡である靈魂をもつ連中のことをきみに話したのは、ただ、いてつく寒気の中に想像力の熱気があることを知ってもらいたかったからだよ⁽²⁵⁾。もしよければ、今夜、もっとはるかに確固として、もっと輝かしい事柄をお聞かせしよう。

カリクラテス

ぜひ早く聞かせてもらいたいね。きみはわたしを新しい世界に連れていってくれるのだ。

<注>

- (1) 不明。
- (2) 紀元前8世紀頃、南ロシア、小アジア地方を中心として活躍した騎馬民族。
- (3) 紀元前2世紀頃、南ロシア草原で活躍した遊牧民。スキタイ人と同じくイラン系と見られる。のち、スラブ人に混入した。
- (4) コペルニクス (Copernicus) のアナグラム。
- (5) カルデア (バビロニア南部地方) で活躍した古代セム人。紀元前7世紀頃、バビロンを中心に新バビロニア王国を建設した。
- (6) 古代ギリシアの長さの単位で、約180メートル。
- (7) 16世紀に流行した民衆的フィギュア・ダンス。
- (8) 古代ケルト人の祭司で、教育、裁判にも携わった。ドルイド教では、宿り木の生じているナラを神聖なものとして崇拝し、月齢6日の夜に黄金の鎌でそれを切り取る儀式を行った。DSR。
- (9) ガリレイ (Galilei) のアナグラム。
- (10) 詩編19章5。
- (11) ローマ教皇ウルバヌス8世 (在位1623-44) と異端審問 (1633) を指す。Notes du Septième Dialogue, 5, CE, p. 86。
- (12) ナス科の有毒植物。
- (13) ヘロドトス (Herodotos)。古代ギリシアの歴史家 (前484頃—425)。
- (14) ヴェネツィア共和国。Notes du Septième Dialogue 6, CE, p. 86。
- (15) バルカン半島北西部のイリュリア地方の住民。
- (16) サンマルコ広場の搭 (大鐘楼) を指す。316ピエ (約100メートル)。Notes du Septième Dialogue, 7, CE, p. 86。
- (17) サグレドとサルヴィアティは高貴の生れだったが、ガリレイに保護を与えたことでいっそう高貴な人物であることを自ら証明した。やはり2度にわたって高貴さを発揮したこのピサの哲学者 (ガリレイ) は、感謝の意を永久に留めるために、その著作『新科学対話 (Dialoghi delle scienze nuove)』に対話相手として2人を登場させている。同上 8, p. 86。
- (18) ドミニコ会士のアンフォッシ (Anfossi) 教授は1820年にローマで出版した著書において学者シャルル・ボネ (Charles Bonnet, 18世紀スイスの博物学者) を不敬者、異端者、冒瀆者呼ばわりしている。おまけに彼は、著者 (セッテル (Settele) 教授) がふとどきにも、地球の運動と太陽の不動性に関す

るコペルニクスとガリレイの理論をあえて再録した『天文学原理 (*Elémens d'astronomie*)』の出版を禁止したことを自慢している。この情報を提供した『文芸雑誌 (*Journal littéraire*)』によれば、これはドミニコ会の検邪聖省(異端糾問機関)と教授たちの権威を厳粛に支持するためだった。同上 9, p. 86。

- (19) ジャン・ショヴァン (Jean Chauvin)、すなわちカルヴァン (Calvin) は実際、ある主任司法官を、夕食後に妻とダンスをした廉で有罪にした。同上 10, p. 86。
- (20) デカルト (René Descartes) のアナグラム。
- (21) 市原豊太訳、白水社、1959、p. 221。
- (22) 原文はAnitusとなっているが、アニュトス (フランス語表記でAnytos、ギリシア語表記でAnutos) のことと思われる。ソクラテスの告発者として知られる紀元前400年頃のアテナイの政治家。
- (23) 『哲学辞典 (*Dictionnaire philosophique*)』の「恩寵(*grâce*)」の項に、「現代ローマの神聖な顧問たちよ、高名にして無謬なる神学者たちよ、あなたがたの崇高な決定に私以上の敬意をいただく者は一人もいないのである。しかし、もしアエミリウス・パウルス、スキピオ、カトー、キケロ、カエサル、ティトゥス、トラヤヌス、マルクス・アウレリウスがかつて彼らの力でなんらかの信用を得たことがあるローマに再来したならば、彼らが恩寵についての諸決定にいささか驚くであろうことは、あなたがたもみとめねばなるまい。聖トマスによる健康の恩寵やカイエタヌスによる医薬の恩寵、外部的恩寵や内部的恩寵、無償の恩寵、成聖の恩寵、助力の恩寵、常住の恩寵、協力の恩寵、ときに無効の効果的恩寵、ときに不十分な充足的恩寵、変転的恩寵、合宜的恩寵についての話を聞いたならば、彼らはなんと言うであろうか。正直なところ、彼らはあなたがたや私以上に理解するであろうか。」(高橋安光訳、法政大学出版局、1988、p. 220)。「渦」はデカルトの渦動説を指す。同様に、実体的形相はトマス・アクイナス (Thomas Aquinas) の、予定調和はライプニッツ (Leibniz) の用語である。Notes du Septième Dialogue 12, CE, p. 86。
- (24) 古代ギリシアの貨幣単位で、6分の1ドラクマに相当する。わずかな金額の意味。
- (25) ライプニッツは1646年にライプツィヒに生れた。このほとんど万能の哲学者は対話のジャンルでも自分の力を試した。彼の小論の1つに『事と言葉との対話 (*Dialogus inter res et verba*)』と題するものがある。同上 13、p. 86。

第8の対話 蛮族の哲学者の偉大なる発見：彼らに比べたら、ギリシア人などは子どもみたいなもの

Huitième Dialogue: Grandes Découvertes des Philosophes Barbares; Les Grecs ne sont auprès d'eux que des enfans

エウヘメロス

さまざまな国で何人かの人たちが思考する能力を育て始めてからは、なんであれ物体がどうして空中から地上に落下するのか、また、メンフィスとシエナの有名な井戸で実験したように、物体はどうして、もし地表で停止しなかったら、地球の中心まで行くのか、について絶えず探求してきたが、徒労に終わった。それらの実験では、もっとも強力な機械によって空中にもっとも高く投げ上げられたもっとも重い物体ともっとも軽い物体が再び落下するのが見られたのだ。民衆は、空中に上がった物体が地面を求めて空中から出発するのを見て、それらの現象が彼らの好奇心にふさわしいものだったとしても、昼の後に夜がくるのを目にするほどにしかおどろきはしなかった。哲学者たちは、重力の原因をあれこれ探ぐったものの、発見することができなかった。ところが、ついにわれわれの知らない国、それほど昔でなくても住民たちが裸で歩いていた未開の島、カッシテリッド島⁽¹⁾に1人の賢人⁽²⁾がいて、他の賢人たちの発見した事柄を基に、それらよりはるかにすぐれた自分の発見を重ね、おどろいているヨーロッパに向けて、哲学の誕生以来、すべての学者たちの精神をいたずらに占領していた1つの問題の解答と証明を提示した。つまり、重力の法則とは、永遠の

地理学者たる神自身の第1定理から派生したものにすぎないということを明らかにしたのだ。

この知識に到達するためには、地球の直径を知らねばならず、地球の衛星である月が頂点に達した時点で地球の中心から地球の直径の何倍離れているかを知らなければならなかった。その次に、物体の落下を計算して、物体を落下させるのは一般に考えられていたように空気の流れではないことを証明しなければならなかった。カッシテリッド島の哲学者は、引力というものが重力をつくり、質量、つまり物質の量に比例して作用するのであって、液体が動くように面積に比例するのではないことを証明したのだ。したがって、この引力は、100の物質をもつ物体には100として、物質が10分の1しかない物体には10として作用することになる。

また、なんであれ地球の近くにある物体は1分間に5万4千ピエ⁽³⁾の距離を落下することを発見しなければならなかった。もし地球半径の60倍の高さから落下するとしたら、1分間に15ピエしか落下しないことになるだろう。ところで、月はまさしく地球半径の60倍の位置にあって、地球の子午線中を地球に向かって1分間にわずか15ピエだけ移動する物体であることが計算によって証明された。さらに、この天体はその物質に正比例して回り、引き付けられ、重さをもつということだけでなく、地球に近づけば近づくほど地球にかかる重さが大きくなり、遠ざかれば遠ざかるほど軽くなるものであり、それはその距離の2乗に比例することも証明されたのだ。

自然界のすべての法則は均等だから、この法則もすべての天体間に存在が認められる。その結果、どの惑星も、質量をもつかぎり、太陽との距離の2乗に比例して、太陽に引き付けられ、その引力によって回り、それに対して重さをもつことになるのだ。

それだけではない。これらの蛮族はさらに、ある物体が中心に向かって動くと、その中心の周りにその物体が移動する時間に比例する領域を描くということ、その物体が時間に比例する領域を描くと、その物体はその中心に向かって回り、引き付けられ、重さをもつということを証明した。この法則と他のいくつかの法則から、カッシテリッド島の哲学者は太陽の不動性と惑星の運行、さらには太陽の周りを楕円を描いて回転する彗星のそれまでも証明したのだよ。

この創造は、3角形や12面体によるプラトンのそれのように行われたのでも、音楽の7音によるピュタゴラスのそれのようになされたのでもなく、最高に卓越した幾何学によって成し遂げられたのだ。きみはおどろいているようだね。おどろいて当然だよ。この蛮族が人類に対して、光とはなにかを証明したことを、また、彼が太陽光を、ヒポクラテスが人体の活力を明らかにしたよりも巧妙に解剖できることを知ったら、たぶんもっとおどろくだろうよ。ともあれ、かの国のある偉大な天文学者⁽⁴⁾が、偉大な詩人でもあるのだが、自身についてこう言ったのは間違っていないわけだ。

すべての人間の中でもっとも神々に似ている者。

カリクラテス

そして、きみはすべての人間の中でもっともわたしに善行を施してくれた者だよ。なにしろ、わたしの偏見をすっかり取り除いてくれたのだからね。われらがエピクロスは、じつに善人だったし、あらゆる社会的美德を備えていたのだが、理論体系を築きたいと見栄を張った、無知で不遜な男にすぎなかったわけだ。きみたちの島民は、たいへん立派な人物だから、近隣諸国に弟子や競争相手がさぞたくさんいただろうと思うよ。

エウヘメロス

そのとおり。真理を教えるのが追いつかないくらいたくさん弟子をつくったよ。

カリクラテス

競争者の中には靈魂とはなにかを発見する者もいるだろうな。わたしはそれが気になってね。われらがギリシア哲学者たちがさんざん論じてきたのに、われわれになに1つ教えてくれなかった大いなる謎だよ。言ってくれたまえ、ある惑星が別の惑星に向かって重さをもつとか、光を細かく分析できるとかを知ったところで、自分自身について知らなかったら、なんの役に立つだろうか。

エウヘメロス

きみは少なくとも、その靈魂を支配する自然と偉大なる存在をよりよく知ることを学んだのだよ。

カリクラテス

われわれの靈魂がいかに扱いにくいものだとしても、少なくともきみたちの北方の偉大な理論家たちはわれわれの肉体について完全に知り尽くすだろう。それは、わたしの靈魂と同じくらいに興味深いことだよ。こう言ってもいいと思うが、天体の重量を測った人たちなら、地球上で人間はどのようにしてつくられるのか、この地球はどのようにして形成されたのか、地球はどのような変革を経てきたのか、いつ崩壊するのかを完璧に知っているはずだ。わたしは、動物の発生之谜についてすべて知りたいのだ。自然全体に生命を与え、氷の中でも生きているこの熱はどこからくるのかを。このわたしはどのようにして存在しているのか、わたしを運んでいるこの地球は、わたしを養っている動物たちや植物たち、そしてこの万物を構成する諸要素は、どのようにして存在しているのかを。

エウヘメロス

きみも相当にあつかましいな。わたしが旅の途中で知り合ったガリア人の侯爵に似ているよ。彼は回想録にこう書いている。「自分の姿をよく見れば見るほど、わたしがふさわしいのは国王しかないとわかった」⁽⁵⁾とね。きみはすべてを知りたがる。どうやら、自分が神にふさわしいと考えているようだな。

カリクラテス

わたしの好奇心をばかにしないでくれ。もし好奇心がなかったら、なに1つわからないだろうよ。わたしはきみたちの蛮族の学者のところへ行行って学ぶわけにいかないのだ。妻がシュラクタイにわたしを引き止めているからだよ。妻は、自分のお腹の中で生じていることをわたしほどにも知らないのに、どうしてわたしの子どもを産むことができたのだろうか。神が全世界を動かす原動力をはっきり知ったきみたちの学者たちは、われわれの世界がどのようにして存続するかについてもわかるのだろうか。

エウヘメロス

自分自身の内部にあることよりも自分の外部にあることをよく知っているというのは、1つ以上の分野でよくあることだよ。そのことについては次回の対話の中で話し合おうではないか。

<注>

- (1) イギリスに隣接したイギリス領シリー諸島。古代にはカッシテリデス・インストラ (Cassiterides insulae) の名で呼ばれた。これはギリシア語のカッシテポス (錫) から派生したものか、逆に「彼女らはほとんど離れている (elles sont presque séparées)」という意味のもととブリタニアの言葉カッシテリ (Cassiteri) から来たのか、いずれにしても、ヴォルテールはシリー諸島の錫のことは考えずに、やはり錫を産出するイギリスをカッシテリッド (Cassiteride) と呼んだ。この島の住民はウェルギリウス (Vergilius) が『牧歌 (ecloga)』第1歌の中でうたっているように、世界から「ほとんど離れている」のである。Notes du Huitième Dialogue, 1, CE, p. 92.
- (2) アイザック・ニュートン (Isac Newton) は、1642年のクリスマスの日にリンカーンシャーのウールズソープで生まれた。エトルリアの人ガリレイが歳月の重み、とりわけ不運の重みに押しつぶされていたのとはほぼ同じ頃である。同上2、CE, p. 92.
- (3) 1ピエは約0.3248メートル。
- (4) エドモンド・ハリー (Edmund Halley)。イギリスの天文学者 (1656-1742)。同上3、CE, p. 92.
- (5) ラッセ侯爵 (Le Marquis de Lassai) 『回想録 (Mémoires)』第4巻、p. 322。1756年にローザンヌで再版された。同上4、CE, p. 92.